

( A:目標を上回った B:ほぼ目標どおり C:目標を下回った)

学校経営目標等	具体的計画	今年度の達成基準	自己評価(中間)		自己評価(最終)			分析・改善方策	学校関係者評価
			状況	評価	達成状況	評価	総合評価		
「確かな学力」を育成する。	落ち着いた学習環境を作る。そのために、学習規律の徹底を図る。 ・正しい姿勢で学習する。 ・話を最後まで静かに聞く。 ・発表は「です」「ます」まではっきりと言う。 ・先生には丁寧な言葉遣いをする。 など ・ノーマディアに取り組む。	・基本的な学習規律や望ましい学習態度を繰り返して指導し、定着を図る。 ・授業の始まりと終わりにけじめをつけ集中させる。 ・「漢字ぐんぐん」「計算ぐんぐん」を各学期ごとに設定し習熟を図る。 ・ノーマディア3年目、定着を図る。	・「授業の始まり」「授業の終わり」のあいさつが定着した。 ・「漢字ぐんぐん」「計算ぐんぐん」は計画通り実施できた。 ・4年生の学習規律がすこし乱れた。 ・ノーマディア週間にチェック表を出さないとうまくできない実態がわかった。	B	・学習規律の定着とともに落ち着いた学習ができつつある。 ・「算数」の「割合分野」が課題となっている。対策が系統的に必要。 ・高学年における「自主学習ノート」の取り組みはよくできた。 ・個々においてはまだ基礎学力に課題がある。	A	A	「確かな学力の育成」 学習規律の定着とともに落ち着いた学習ができつつある。また家庭学習の取り組みは低学年は宿題、高学年はその上に自主学習の取り組みが定着した。授業では相談活動や相互評価の形態も増え、実物投影機などのICT機器の活用もできた。また「校長プリント」等による自主的なプリント学習は低学年にも徐々に広がりを見せている。一方、基礎事項の定着に対する補充学習の時間は十分に足りていない。算数の「割合」に課題があり、系統的な学習が必要である。	学習規律の定着とともに落ち着いた学習ができている。また家庭学習の取り組みについては、低学年は宿題、上学年はその上に自主学習の取り組みが定着した。「校長プリント」等による自主的なプリント学習は低学年にも徐々に広がりを見せていることに感心する。  6年生は担任の途中交代があったが、校内人事配置が配慮されてよい継続ができていて安心した。
	問題解決的な学習、体験的な学習により、児童主体の学習を展開する。 ・学習のめあてを提示し、自ら考え、判断し、表現する学習を展開する。 ・考えを表現し合い、学び合う場を設定する。 ・体験的な学習、作業的な学習を取り入れる。	・教員が1人1回は、研究授業を行い、授業者及び参観者のお互いの授業力の向上を図る。 ・「初任者研修」をすすめて、同時に初心に立ち返って、個々の授業力向上を図る。 ・ICT機器を活用し、視覚的にわかりやすい授業を工夫する。	・1人1回の研究授業は達成できていない。 ・初任者の指導案検討を通じ、自らの指導を振り返ることができた。 ・ICT機器(実物投影機)を全教室配置でき、活用できた。	B	・授業の中に相談や相互評価をするものが増えた。また前に出た発表や説明など児童主体の学習形態が徐々に進められている。 ・研究授業公開はなかなか進まない。 ・ICT機器の利用は定着してきた。	B			
	自主的な学びを支援する。	・中、高学年に「自主学習ノート」の定着を図る。 ・「校長プリント」の取組を発展・深化させる。 ・放課後学習サポート事業を活用する。(年間200時間計画)	・高学年の「自主学習ノート」提出率がほぼ100%だった。 ・「校長プリント」は種類・量が増え、3年生・4年生にも広がった。2年生(九九)1年生(漢字)も取り組んだ。 ・放課後学習も順調に進んだ(各学期20数名の在籍)	・「校長プリント」へ取り組む児童が3年・4年生に増加し、広がる。2年生、1年生にも。 ・「放課後学習サポート事業」(200時間)は活用できた。実績は実参加児童約30名、実施回数約45回。のべ約450名。 ・学習内容は低学年はプリント、高学年は自主問題集。	B	A			
自ら学び、友と伸びる、心豊かな子どもを育成する。	「やさしく思いやりのある子」を育てる。	お互いを尊重し、心を合わせて協力して取り組む児童を育成する。 ・気持ちの良い言葉遣いをする。「ありがとう」「ごめんなさい」が自然に素直に言える児童を育てる。 ・困っている人や年下の人に親切にする。 ・誰とでも仲良くし、助け合える児童を育てる。	・お互いを尊重するために、気持ちの良い言葉遣いができるようにする。また、逆に、言われて気持ちよくない言葉遣いはなくしていく。 ・自分や友だちの良さに気づいたり、発表したりする場を設定する。 ・縦割り班あそびや幼稚園との交流などを通して、年下の人に親切にする心を育てる。	・帰りの会などで「友だちのよいところ」を発表することができている。 ・人権学習で人権に関する授業が計画的にすすめられた。 ・「みんなちがっていい!」集会を実施。 ・「人権の木」の取組が積極的にすすんだ。 ・児童会「レベルアップ集会」実施など、自ら考えられる活動ができた。	A	・日々の取り組みや人権学習により、「やさしく思いやりのある子」の育成ができている。 ・「友だちの良さ」に気づいたり発表する機会も増えてきた。 ・児童会の集会活動で主体的な取組ができた。(楽しくわかりやすい劇など) ・登下校バスで低学年の世話がやさしくできる。(善行少年団体表彰)	A	B	「やさしく思いやりのある子の育成」 日々の学級経営で級友の「良いところ」を見つける目をどの学級でも養っている。児童会の活動は自主的にできるようになり、その姿を全校が手本とできるまでになった。教職員による「児童理解研修」は有意義であり、一体感のある教職員集団になってきた。一地域の登下校バス児童が「善行少年団体表彰」受賞となったが、当たり前にとどの子もできる。  5年生の40人単級は心配だったが、学校組織的対応でうまくいったことに感謝する。特別支援学級のクールダウンの場所に一考が必要。
		児童理解を深めるため、日常的に情報交換をする。 ・支援の必要な児童には、ケース会議等により組織的に対応する。 ・保護者や関係機関と連携して支援する。	・毎日の終礼で、児童について情報交換すること、すべての職員で児童を指導していく体制を整え、児童理解をより一層深めるようにする。 ・支援の必要な児童には、「校内ケース会議」を開き、皆で対応を検討実践する。保護者と指導方針を共有すると共に、時には、外部の関係機関等と連携を図るようにする。 ・子ども理解の研修を定期的に行う。	・終礼が定着し、情報交換により、児童理解が進んだ。 ・管理職・生徒指導主事を軸に、支援の必要な児童への対応について、関係機関との連携によりできている。 ・定期的に子ども理解の研修ができた。	B	・終礼が定着し、情報交換により、児童理解が進んだ。 ・管理職・生徒指導主事を軸に、支援の必要な児童への対応について、関係機関との連携によりできている。 ・定期的に子ども理解の研修ができた。	B		
小中連携をすすめる、地域や保護者と協力して児童の指導に当たる。	学校支援地域本部事業を実施し、保護者や地域と協力して教育を行う。	・学校支援ボランティアと連携して、児童の教育に当たっていく。 ・地域の人材を活用したり、地域に出かけたりする学習をすすめる。	・「家庭科」「読み聞かせ」「給食配膳」ボランティア支援をいただいている。 ・障害者自立支援施設や地元スーパーなどに出かけて学習できた。 ・5年生が視覚障がい者の方から学べた。	B	・登校時の見守りを地域の方にお世話になっている。(塔中老人会見守り隊に替わり) ・「家庭科」「読み聞かせ」「給食」の支援もなくてはならないものとなっている。 ・地域とともにある学校作りをさらに進めたい。	B	A	「地域とともにある学校づくり」 地域の皆さんの理解と支援により、各学年とも加茂の特色を活かした学習がすすんだ。数々の体験学習が児童の夢を醸成している。たくさんの方から授業参観を受け、様子を公開できた。加茂中学校との小中連携も定着し「中1ギャップ改善」につながっている。本年も学校支援ボランティアをはじめ数々の支援のおかげで安心・安全な学校経営ができた。感謝している。  また、特別支援学級での「滑舌練習」を年間カリキュラムに入れて取り組むと効果が期待できる。  日々の学級経営で級友の「良いところ」を見つける目をどの学級でも養っている。自発的な児童会の活動を継続させる。教職員による「児童理解研修」は有意義であり、さらに一体感のある教職員集団をめざしてほしい。	
	豊かな自然や地域の特色を生かした体験的な活動を行う。	・加茂地域の自然や文化を生かした森林学習や昔遊び・お飾り作りなど、自然や郷土を大切にすることを育てる。	・森林学習は計画通りできた。 ・昔遊びは地域の方に「児童祖父母」も加わり実施できた。	B	・学年に応じて地域の特色を生かした様々な体験活動が進んだ。(他に鮎の放流など)	B			
	危機管理意識を高め、事故等の未然防止に努めるとともに、常日頃から「報告」「連絡」「相談」を密にする。	・避難訓練を学期に1度計画し、さらに避難移動しないミニの訓練を数度行う。 ・「緊急時引き渡し訓練」を実施する。	・火災、地震の避難訓練、Jアラート訓練などできた。 ・昨年の反省を活かし、「引き渡し訓練」が実施できた。	A	・実際の地震の時、全員素早く机に潜るなど、避難訓練を含め、危機管理意識が高まっている。	A			
	小中連携をすすめる	・児童会・生徒会交流をすすめる ・「教職員合同研修」をさらに深める。 ・小中相互の授業研究をすすめる。 ・小中連携から、さらに幼小中連携を図る。	・中学校生徒会による「朝のあいさつ運動」ができた。 ・「職員合同研修」「授業参観」ができた。 ・幼稚園との交流は深まった(旗のエール交換) ・小学校から中学校へなかなか出かけられない。	B	・中学校との連携はすすんだ。中学校の連携担当者が軸となって発展した。 ・中学校定期テスト時に大多数の教員が参観授業に来れた。 ・「出前授業」12/12(6年生)もうまくすすんだ。	A			中学校との「小中連携」が進展していることに安心する。  地域とともにある学校づくりが進んだ。さらに連携・協力を期待する。